あさま山荘事件から50年

公益社団法人　日本防犯設備協会　特別講師　富田　俊彦

一　忘れられない事件

私は、警視庁第二機動隊員として羽田事件、成田空港闘争警備、東大安田講堂警備、沖縄返還闘争警備、連合赤軍あさま山荘事件の現場に出動して激動の時代を経験しました。

中でも、忘れられない事件は、1972年2月、長野県軽井沢町の保養所施設で過激派の犯人が銃を手に人質をとって立てこもった「連合赤軍あさま山荘事件」です。

今年はあさま山荘事件から50年となることから、警視庁第二機動隊において、現職の若い隊員に対し「元隊員が語る50年前のあさま山荘事件」と題して講演させて頂きました。

現在の警察では、ハイジャックや重要施設占拠事件等のテロ事件に対応するために、特殊急襲部隊（SATサット）を編成して警視庁や大阪等の8都道府県警察に配備され、装備資器材も飛躍的に充実しており、頼もしい限りです。これに反して、当時の機動隊の防弾対策は不十分で装備資器材も不備で、現場で急遽、銃弾を防ぐ大盾を二枚重ねで補強し、土嚢袋を積み上げ、靴にわら縄を巻くなど、現在とは比べようもなく、50年前に体験した事実と隊員の想いを話すことにしました。

軽井沢へ出動することが決まった日、犯人は銃を所持しており、命をかけた厳しい警備が予想されたので、妊娠中の妻と幼い息子を浜松の実家に帰しました。

妻のお腹にいた長女が今年50歳を迎え、当時を振り返ると様々な想いが交錯します。

2月22日、早朝、第二機動隊は内田尚孝隊長の指揮下139名で出動し、私は隊長車の運転を担当して軽井沢へ向かいました。

事件現場は、氷点下15度、積雪30cmの極寒で足場の悪い環境下、銃弾の飛び交う過酷な条件の中、内田隊長は、人質の無事救出と犯人検挙のために、連日深夜まで不眠不休で戦術を練り、強行作戦計画を策定し、現場では強行偵察活動、説得工作、土嚢袋積み、大盾を重ねる作業などの指揮を執り、強行突入作戦の準備を進めました。

鉄球と放水で山荘への突入が始まる

二　決意を込めた国旗

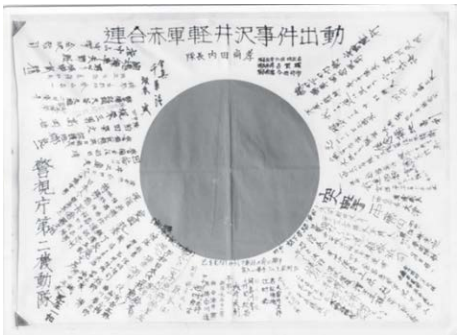
人質救出強行作戦を控えた前夜、内田隊長は全隊員を宿舎の食堂に集めて、明日の強行突入の予定を訓示した後、作戦の無事成功を誓いカップ酒で乾杯しました。

隊長から日の丸の国旗を3枚買ってくるよう命じられたのは夕食の前で、軽井沢の町を探し回り、小さな洋品店で、やっと2枚の国旗を購入しました。

夕食後、テーブル上に広げられた国旗に、最初に隊長が署名し、続いて隊員が次々と名前と決意を書き記しました。

「強い想いがあれば、どんな困難にも打ち勝つことが出来る。」、「人事を尽くして天命を待つ。」という教えは隊長の覚悟であり、事前にやれることは全てやった、明日は、最前線に行く隊員と後方支援をする隊員が心を併せて助け合い、二機が一枚岩で団結して、命をかけて頑張るぞという強い決意とお互いの無事を祈って署名したのです。

多くの隊員が並んで署名の順番待ちをしていて、書けずにいると「帰ってからゆっくり書けば」と言う隊長のアドバイスに、私は、帰隊してから書くことにしました。



第二機動隊員が署名した国旗

その後、国旗のことは、すっかり忘れており、署名する機会を失って、この国旗を目にしたのは数年後のことで、警視庁本部の2階警察資料館に展示されている懐かしい国旗には、私の名前は無く、一人取り残された寂しさと複雑な気持ちになりました。

今でも、この国旗に書かれている隊長や隊員の名前を見ると懐かしい顔が浮かび、当時のことが蘇ります。もう1枚の国旗は現在、警察博物館に展示されています。

三　生き方を決めた尊い教訓

2月28日、午前9時50分、人質救出作戦が開始され山荘への強行突入が行われました。

強行突入前決意の訓示

銃弾と爆弾が飛び交う過酷な条件の中、「拳銃は使用しない。犯人を傷つけてはならない」という厳しい命令のもと放水とガス弾で対応する長時間の激しい攻防の末、午後6時15分、人質の牟田泰子さんを218時間振りに無事救出し、犯人5名を逮捕して目的を果たしましたが、抵抗する犯人の狙撃により、第二機動隊・内田尚孝隊長（当時47歳）と特科車両隊・高見繋光警部（当時42歳）の2名が殉職し、隊員26名が負傷する大きな犠牲を払いました。隊員の先頭に立って指揮をとっていた内田隊長が犯人の凶弾に倒れ、壮烈な殉職をされたことが信じられず、隊員思いの隊長を守れなかったことは残念で悔いが残りますが「自らを犠牲にして職務を全うする」警察官の使命の重さと尊さを教えられました。

内田隊長の手帳には「世の中の人が安心して暮らせるようにと役立つことが、私たち警察官の使命である。万が一の時に自分の命を差し出すことがあっても、悔いは無い。自分はその覚悟を持って毎日家を出るが家族にはその覚悟は無いかもしれない。世の中が平和になり、事件を起こす人がいなくなれば、悲しい思いをする人もいなくなり、そういう平和な世の中になることを願って、日々頑張っている。」と仕事に取り組む姿勢と決意が書かれていました。その後、警察生活で仕事に行き詰り悩んだ時は、内田隊長の教訓を思い出して「命をかけて国民のために、仕事をしているか。」と常に自らに問いかけてきました。

インターネットで「あさま山荘事件」を検索すると、直ぐに写真や映像で見ることが可能ですが、歴史的な事件の現場で活躍した当時の隊員は、高齢で次々と亡くなり、命をかけて任務を遂行した貴重な体験を語る人が少なくなりました。「あさま山荘事件」を伝説にすることなく、若い警察官に確実に引き継がなければなりません。

最近、公共の場所での無差別殺傷事件や改造銃を使用したテロ事件が発生しており、治安の悪化が案じられます。主義主張の違い、差別や不条理な社会が許せないなど、反発する理由はいろいろあると思いますが、「理想」や「平和」を主張して、暴力を手段に尊い人の命を奪うことは絶対に許されません。世界の各地で争いが絶えず、多くの人達が殺害され、血を流している今だからこそ、過去の過ちを繰り返すこと無く、人間としてどうあるべきか、命の大切さを真剣に考えて、日本の将来を担う、子ども達に平和へと続く道を示さなければなりません。

そして、超法規的措置で海外に逃亡中の、坂東国男容疑者が逮捕されて、法の裁きを受けるまで、「あさま山荘事件」は終わることはありません。